
恋桜

風林火山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋桜

【Nコード】

N8604P

【作者名】

風林火山

【あらすじ】

中学2年の清水蒼志は同じクラスで横の席の椎菜優季と出会う
そして優季に恋をする・・・蒼志にふりかかる数々の試練
優季を手に入れるために全力をかける少年の物語

始まりの電話

僕、清水蒼志は桜が咲き乱れるなか蒼志は親友、炎城紅と時間ギリギリで登校していた。

蒼志は普通の子だった。学力・運動双方とも中の上で飛びぬけて出来る教科やスポーツもなかった。

そして蒼志達は今日から中2だった。蒼志は中2でもこの普通というのが変わるとは思ってもいなかった。残念ながら紅とはクラスが別れてしまった。僕は2 - 3組紅は2 - 2組だった。蒼志は出席番号5番だ。みんなが席に着き蒼志の隣に座ったのは出席番号35番の椎菜優季だった。そしてこれが今後の人生を変える出来事となった。

蒼志は優季と初対面だった、1年のころ何度か見たことがあるものの喋るのは初めてだった。

最初に話を切り出したのは優季だった。わからない数学の問題を聞いてきた。蒼志はその瞬間ドキッとした。女の子がこんなに近くに居るのはテンションが上がった。そのことをきっかけに蒼志と優季はとても仲が良くなった。最初は学校でよく喋るくらいの事だったしかし月日は流れて12月年賀状の季節になった

優季は「住所教えてよ！」と明るく蒼志にいいよった。もちろん蒼志は「いいよ」といい住所を教えた。

だが、蒼志は年賀状を作っている最中ふとおもった。「優季の住所聞き忘れた・・・」そのことに気づき

蒼志は優季と仲が良かった綾沙瑠美に優季の電話番号を聞いた。優季はまだ携帯を持っていなかった。

ドキドイした。女の子の家に電話をかけることなどめったにない事だから・・・5・6回コールしたしたら男の声がする、おそらく父だろう。「はいもしもし、椎菜ですけど。」太い声でした。「2

- 3組で同じクラスの清水ですけど。緊張しつつも何とか言えた。

「今でかけてます。」ちよつと怖かった。「そうですねかまたかけなおします」と言つて電話を切つた。次の日もう一度電話をした。コールが3回くらいしたら「はいもしもし」明るく元気は声が受話器から聞こえてくる。「優季？蒼志だけど」その言葉をきくとうれしそうに「あつ！蒼志？どうしたの？」明るい声が聞こえてきた。住所を聞いてクラスの事など話してらうちに2時間もたつていた。蒼志は初めてだったこんなに時の流れが速く感じられるのが・・・そしてそれから毎日のように電話をしくだらなことを話しまくっていた。蒼志はいつのまにか電話をするのが待ちきれなくなっていた。

始まりの電話（後書き）

恋桜は僕の初めての作品です。

もしよかったら読んでみてくださいー

2人の気持ちと心の中（前書き）

電話をし始めてどんどん距離を縮めていく2人だけと告白というところが2人ともできず、そのまま時が流れてしまう
そして蒼志はとんでもない事実を知ってしまう。

2人の気持ちと心の中

蒼志は電話をしていく内もはや優季のことが好きになっていた。だけれど気持ちを伝えることができなかった。優季お好きだという保証がなかったし。一番大きな問題は勇気がなかった。

そして優季は・・・「ねえ告白しようかな？」 「うんその方がいいって」 「でも自信ないしな」

そう優季も蒼志の事が好きで親友留美に相談していたのだ。でも2人とも告白することはできなかった。

そして学校や電話で仲良く喋るだけの日々が続いた。2人とも気持ちは同じなのに言い出すことができなかった。そして2人の恋は心の中に閉ざされた。

そして蒼志はとんでもない事実を聞く。電話でいつもと同じように話していると「うち付き合った!」

元気な声が受話器から聞こえてきた。言葉が出なかった・・・頭に言葉が浮かんでこなかった。

「どうしたの?」その一言で我に戻った蒼志は力を振り絞って「そっか、よかったねーごめんちょい出かけるから〜じゃね」出来るだけのもっとも明るい言葉で返事を返したが多分震えていただろう蒼志は心の中で静かにつぶやいた。その夜、眠れなかった、(どうして、どうして)その言葉しか頭に浮かんでこなかった。

次の日、電話がかかってきた多分優季からだろう・・・蒼志は恐る恐る受話器に手を伸ばしたそして

「はい、もしもし」「もしもい?うちだけど」いつもと変わらない明るい声が聞こえてきた。

蒼志は電話し始めてから初めて電話したくないと思った。でも我慢した。喋る言葉が出てこなかった。

でもフツとすると1つの疑問が頭に浮かんできた、「誰と付き合ったの?」それしか聞けなかった。

「おしえてほしい?」「うん・・・」優季はもったいぶった・・・だが「すぐに答えが返ってきた

「林堂蓮りんどうれんだよ」・・・「そっか」それした出てこなかった。

そして優季は言った「少し前まで同じクラスに好きな男子がいたけど諦めた」

え・・・だれだろう?だれだろう・・・考えた・・・そして聞いた。

「誰???」

う・・・「んーよく話して男子バスケだよ」

蒼志は確信した。

2人の気持ちと心の中（後書き）

2話目ができました！

よければ感想お願いしますー><

恋は終わらない(前書き)

蒼志は確信した優季の前好きだった人が蒼志だた事を。
うれしかった半面悔しさでいっぱいだった。
そして蒼志が起こした行動が明らかに。

恋は終わらない

「オレだ」蒼志は確信していた。優季は前オレの事が好きだったんだ、なぜなら2・3の男子バスケット部は蒼志1人だけだから・・・蒼志は涙が出そうになった・・・もつとはやくいつてくれれば、告白していれば、後悔の涙で目がいつぱいになりそうだった、蒼志は「もしかしてオレ？」おもいきって聞いた。

「うん、前は好きだったんだ。学校が毎日楽しくて、「その言葉を聴いて蒼志は気持ちを抑えられなくなった。次の瞬間「オレも大好きだ。ずっと大好きだった。今でも大好きだ」告げていた、告白していた、言葉が勝手に口から出て行った・・・そんな感じだった・・・沈黙が続いた。優季が口を開いた

「ホント？うれしい・・・」蒼志は謝った「ゴメン急にこんなこと言って」はずかしながらも謝った

優季がフフといった「返事したほうがいいよね？」どきっとした「ウン・・・」蒼志は恐る恐る答えた

「今きめられないや・・・明日学校で手紙渡すね」明るい声で言われて蒼志は少しホツとした。

そして次の日・・・帰りのSTが終わり手紙を待っていた。そしてら優季が「はい」といいながら笑顔で渡してくれた。カワイイ・・・蒼志はすごく思った。ここで見るのは恥ずかしかったから家でこっそりと見た。そこにはとんでもないことが書かれていた。

「蒼志へヤツホー優季だよーw

昨日の返事だけいろいろ考えて、すごく悩んだんだけど。

今私は蓮と付き合ってるから蒼志とは付き合えないや。

けど蒼志のことが好きだったっていうのはホントだからね。

これからお友達としてだけどよろしくね」

涙が出た・・・止まらなかつた。人生で初めて振られた・・・初めてこんなに悔しいと思ったと同時に初めてこんなに人を好きになっ

た。諦めようか迷ったでも諦めることができなかった
忘れられなかった、頭から離れなかった、そんなとき家の電話が鳴
った、おそらく優季だろう・・・
電話に出たやっぱり優季だった。「ヨウ・・・優季か」「うん手紙
みた?」「うん」「ゴメンね・・・」
声をきくとまた泣けてきた。泣きながら蒼志は叫んでいた「あきら
めないから!」
優季は一瞬びっくりしたようだけど「ありがと」「優しい声で答えて
くれた。
そおして蒼志は片思いでの新しい恋がスタートした。

すれ違う2人の心（前書き）

優季に振られてしまった蒼志は諦めることができずに、電話で優季の彼氏、林堂蓮

のことなどでいろいろな相談を受けていたがラブラブな2人を見て
いるて

諦めようと努力する

そしてとんでもない事実がおこる

すれ違う2人の心

蒼志は振られても電話を続けていた。電話の回数は減ったものの電話をし続けていた。

やはり優季への気持ちは本物だったがこのまま好きでいいのかという気持ちが出てきたのだ・・・
蓮にしてみればあまり気持ちよく思わない話だ。でも諦めることはできなかった。

電話では蓮の話で持ち切りだった。とても苦しかった。嫉妬心を燃やしまくっていた。

でも蒼志は2人を別れさせようとはしなかった。やっぱりなにかあっても優季に幸せになってもらうのが1番よかったから・・・

ある日電話で蓮のことで相談を受けた。「蓮ってあんまり自分から電話してきてくれないんだよね・・・」蓮は草食系男子だった。「まあ好きなんだからいんじゃない」蒼志はテキトウに答えた

「そうだねーうちさ蓮みたときに運命感じたんだよねー一目ぼれってやつw」その言葉を聞いて蒼志は

もう諦めようと思った、こんなに苦しいのになんで好きでい続けなければならぬ・・・もう諦めよう

次の日から電話は控えた・・・時間を減らしたり電話をしない日も出てきた。そしてだんだん

電話をしないようになった。そして電話は終わった。そして優季への気持ちもだんだんと薄れていった。そして優季への恋が終わった。そしてまた平穏の日々を取り戻した、楽しい学校生活を過ごしていた。でもそんな平穏な日々もつかの間、ある日1本の電話があった。優季だったびっくりした蒼志は「どうした？蓮とでも喧嘩した？」と聞くと「まあ・・・そんな感じ」ひきつった感じで答えた。それからの電話で蓮の話は全然出てこなかった、久々に世間話で盛り上がった。その日を境にまた毎日電話が続いたがもう優季への愛情は

感じれなかった、気の合う友達ただそれだけだった。

それから数日後とんでもない事実を留美から聞く、なんと優季と蓮は別れていたのだ。

そして優季本人に確かめた。「ホントに別れたの？」優季は強がって明るい顔をして「うん」返事を返してきた。

そのときの優季の気持ちを蒼志は何にもきずいてはいなかった・・・

すれ違う2人の心（後書き）

よかったら感想をお願いします><

好きという気持ち(前書き)

優季は蓮と別れて蒼志の事が・・・
でも蒼志はそのことに気付かなかった。
そして新たな展開が・・・

好きという気持ち

優季は好きになりかけていた。蒼志の事が・・・

蒼志は気付かなかった、でも蒼志には気づいてほしかった。

毎日電話が続いたふざけ合ったり、愚痴をこぼしたり、勉強を教えただこともあった。そんな毎日が続けばいいなと優季は思っていた。

優季はだんだん蒼志への気持ちがおおきくなっていくのを感じていた。

そして蒼志も自分の気持ちが心の底から這い上がってくるのを感じた。忘れかけていたその心が・・・

だけど、やはり簡単に言い出すことができなかった。「好き」という2文字が言うことができなかった。

蒼志はその時1日1日に満足していた。こうしてくだらないことを電話で喋ってそんな日々が好きだった。

そして今日もこんな日が来ると思っていた。電話に出ると「蒼志？」いつもと感じが違った。「どうしたの？」優しく問いかけた。そして今までのことが全て壊れるかのような信じられない言葉が返ってきた。「ウチ蓮とまた付き合った・・・」「え・・・」「動揺した。「なんで？」と聞きくわしく話を聞いた。あの草食系の蓮がまたやり直そうと告白したのだ。優季はその言葉にグツときたらしい。そしてまた蒼志の気持ちは届かなかった。やっぱり無理なのかな・・・

・蒼志は思いつめる。

でもやはり諦めることができなかった好きという気持ちに嘘はつけなかった。それから蒼志は優季の親友、留美に相談した。そして告白をすることを決意した。

次の日。電話をした。「どした？」いつもと変わらない明るい声が聞こえてきた。蒼志は話を切り出した「あのさ・・・オレ好きな人いるんだ・・・」びっくりしたように「誰？」ときいてきた

蒼志は恥ずかしくストレートに言うことができなかった。「2 - 3

組だよー」「マジで？香風^{かな}？」テキトウにクラスメイトの名前を出した。「違うよー」「こんなやり取りが何度か続いた
「わからんーもう教えてー」
「優季だよ」「やっぱ諦めれんわー大好きだもん」

大好きなのに・・・（前書き）

告白した蒼志・・・優季の返事はどうなのか・・・

大好きなのに・・・

「え・・・」戸惑っていた。「優季が忘れられなくて・・・」優季は「そっかありがとうー」

少し期待した。優季も「うちも好きだよ」って言ってくれることだが・・・その夢は叶わなかった。

「ゴメンね。蓮の事が好きなんだ・・・。蒼志は友達としてなら大好きだよ！」

どうしてだろうどうしてこんなに大好きなのに・・・振り向いてくれないんだろう。考えれば考えるほどわからなくなってきた。「これからも電話したいんだけどいい？」明るい声で慰めてくれるのか声をかけてくれた。蒼志は「う・・・ん・・・」ゆっくりうなずいた。

もはや蒼志と優季を繋ぐものは電話だった。やはりなにを言われても嫌いになることはできない。

蒼志は思った。好きならば好きでいいやん・・・ずっと好きでいる。

そして、それから片思いの電話が続いた。

そして蒼志は諦めようとしなかった。気持ちが伝わらなくても蒼志は優希の事が好きだった

ましてやどんどん好きになっていった。

ある日買い物帰り優季の家の近くをとおった。そしたらなんと優季と蓮とのデートを見た。

どうやら2人は一緒に犬の散歩をしていた。それを見て蒼志は心が痛くなった。

あーオレもあんな感じになりたいな。などと思いながら2人を見てその場を去った。

ある日優季から電話があり「ウチの家来てー」と言われた誘われて蒼志はうれしかったが、仲がいいといつてもい異性相手に彼氏もいるのにいいのか？という意味で「行っても大丈夫なの？」

聞き返した。そしたら、「話したいことがある」「と言われ蒼志はドキドキが止まらなかった。
お気に入りの服で出かけた。
そしてそこでとんでもない事実が告げられる

チャンス到来（前書き）

優季は蒼志を呼び出しとんでもないことを告げる
そして呼び出したわけとは・・・
そのあと蒼志にチャンス到来！？

チャンス到来

蒼志は玄関前に立ちインターホンを押した。そして部屋の中から「ちよつと待ってねー」元気な声が聞こえてきた。そして玄関のドアが開かれて、優季の部屋に通された。

最初は蒼志が持ってきたモンブランと一緒に食べながら、くだらない話をしていた。だが蒼志は我慢できなくなっていきよよく聞いた。「で、話ってなんなの？」優季は少し下を向き「別れたんだ・

ポツリと言いつつ放った。「またかー」などと冗談を混ぜながらいろいろ話を聞いた。蒼志にチャンスが到来した。その日は蓮の愚痴ばかりを聞かされた。でも少しうれしかった。今度こそ蒼志は気持ちがつながるかもと思った。

そして毎日のように電話を続けていた。蒼志は今なら気持ちが伝わるかもって思った。そして明日学校で直接告白しようと思っただが・・・

なかなか言い出すことができなかった電話なら言えるもののやはり直接となると言い出せない。

電話で告白をすれば早い話だがそれでわダメな気がしたから直接言おうと思ったのだ。

でもある日登校すると嫌な噂を耳にした。

優季が同じクラスの朝倉桃嗣あさくらとうじと付き合っているという噂だ。

確かに仲が良く蒼志には桃嗣が一方的に蒼志と同じ片思いをしているように見えた。

だが授業中2人をみているととても楽しそうに見えて焼きもちを焼いた

学校から帰宅してすぐさま電話に向かい電話をした。

「優季さー桃嗣と付き合ってるの？」「付き合ってるわけないじゃん」蒼志はほつとした、「そうだよな・・・よかったよかった。変

なこと聞いてゴメンなー」心配して損した気分だった。

そして次の日また嫌な噂を耳にした。優季が同じクラスの平野純ひらのじゅんが好きだという噂だ。また授業中見ていたら、焼きもちを焼いた。そしてすぐさま電話をして確認したら、好きじゃない

と返ってきた。蒼志はまたまたホツとした。こんなことは嫌だと思
い蒼志は明日告白することを決意した。取られる前に取らなきゃと
いう気持ちでいっぱいだった。

だが蒼志の前にある大きな壁はまだ蒼志には見えていなかった。

あのときこうしていねば・・・(前書き)

蒼志は告白することを決意するが

とんでもないことがおこる。

そして蒼志は耐えきれぬのか・・・

あのとぎょうしていれば・・・

蒼志はベットの上で明日の告白の事を考えていた。振られたらどうしよう・・・嫌なことばかりが頭に浮かんでくる。何を考えてもネガティブ思考になってしまう。そんな自分が嫌になって、ベットで深い眠りにはいった。

電話がかかってきた。いつものように優季だろうと思いつつながら蒼志は受話器を取る。「はいもしもし。」だるそうに返事をした。「ていうか疲れ切っていた。頭がパンパンでなにも考えが進まなかった。」

「うちだよー」やはり優季だった。でもこの後、蒼志のパンパンな頭に、さらに石を詰め込むかのような事を聞く。「うち、好きな子できた。」一瞬天使が見えた。まさか・・・最初は自分の耳を疑った、

が聞き間違えではなかった。というより聞き間違えであってほしかった。「だれ？」力を振り絞り聞いてみた。「おしえてほしい？」もったいぶってきた「うん」そしてとんでもない人の名前が出てくる。

「炎城紅だよ・・・」「・・・」

まさか、まさか、まさか、いやまで、蒼志は考える、紅と優季は喋ったこともないはず、聞き間違えだ、このあと頭に岩が乗っかる思いになった。「一目ぼれしちゃった。・・・メチャかわいくない？」体全体が震えた。少しの間止まらなかった。優季にはごめん用事で来たといい。電話を切った。

胸がくるしくベットの上でもがいていた。嘘だと思いたかった。せつかくのチャンスだったのに。悔いばかりが残る。

そんなことを思っていると。もっと前出会って間もないころに告白

しとくんだった

あのとき告白していれば・・・そんなことばかり思う。なんでものとき気持ち伝えなかつたんだらう。

気持ち伝えていれば、後悔ばかりだった。

心が落ち着かなかつた。こんな時蒼志は同じ場所に行っていた。家の近くにある公園の大きな桜の木を見に行っていた。蒼志は昔からこの木をみると一心不乱の状態から解放される。次自分がどのようにすべきか見えてくる気がしたのだった。桜の木の下に立った。

2月だから花はもちろん葉っぱすらなかつたから。さみしく思えた。けど落ち着いた。桜を見ていると優季の笑顔が浮かんできた。

やっぱ諦めることはできない。片思いでもいい。好きでい続ければきっと蒼志の思いは伝わる

そう桜の木にささやかれた感じがした。そして蒼志の思いに決心がついた。

夢と真実と現実（前書き）

紅のことが好きということを知り、蒼志は「大丈夫なのか・・・」と聞いてきた。蒼志は「大丈夫だよ」と答えた。蒼志は「大丈夫だよ」と答えた。

夢と現実と現実

気がつくともベットのの上に居た。

ブルブル電話がなる優季かな・・・電話に出る、「もしもし」「ウチだよー」

「またかよ」蒼志はため息をついた。「また？何言ってるの？今日は初めてだよー」え・・・

「え・・・紅の事が好きってさっきいわなかった？」返事がなかった。「・・・なんで知ってるの・・・」

まだ誰にも言っていないのに・・・「そうさっきまで見てたのは夢だった。でも蒼志にはどこからが夢でどこからが現実なのか分からなくなっていた。夢は正夢だったのだ・・・夢だった？と一瞬喜んだものの・・・正夢だったということは紅が好きということだった。恐る恐る聞いてみた。「紅の事好き・・・？」・・・沈黙がつづいた。「うん・・・」

蒼志は夢で見ているせいかわ、涙は出てこなかった。「なんで知ってたの？」そして蒼志は正夢の事を

話した。「すごい！やっぱりこうゆう事よくあるんだー」のんきな声が聞こえた。

そして用事を思い出したといい、電話を切り蒼志の向かった先は・・・やはり近くの桜の木だった。

やはりその桜は蒼志の決心を固めた。

もう、諦めたりしない。好きならずっと思い続ける。相手が振り返ってくれるまで、ずっとずっと・・・好きでい続ける。それが自分の使命にも思えた。

そして次の日、隣の席で優季が待っていた。「昨日どこ行ってたの？」蒼志は桜の事を優季に話してはいない。「ちよつとね」テキストウに終わらせた。蒼志は紅の話を持ち出した。「告白したの？」

「するわけないじゃん、まだ喋ったこともないんだよ」知らなかつ

た。

それから授業中もただの女子とその女子に恋する男子の恋話が続いた。2人とも外から見れば楽しそうだったが。蒼志の心の表情はズタズタだった。

そしてそんな日々は1週間ほど続いた。

そして次の日1本の電話がかかってきた。そして電話をとった優季だった。

「今日は報告がありまーす」ドキドキした・・・蒼志自信の事ではないと知っていたのに・・・

何のことが聞いてみた。「ウチ告白するはー」

え・・・蒼志は・・・オレの時は告白してこなかったのに・・・蒼志は紅に負けた気がして悔しかった。でも驚きはしなかった。なぜなら蒼志はなんとなく感じ取っていただからだ

けどやはり悲しくなった。蒼志は自分がおいてかれる気がした・・・

沈黙（前書き）

優季は紅への告白を決意し。

告白をする。

その返事は・・・

沈黙

蒼志は優希と紅が付き合うとは思わなかった。なぜなら初めて喋る相手に「付き合ってください」と言ってOKを出されるわけがないと思っていたからだ。というよりOKを出してほしくなかった。

そんなことを考えて寝た。そして朝7:00に起床しシャワーを浴びて顔を洗い学校へ行く準備をした。そして家を出て。紅と学校へ向かった・・・蒼志の心の中はもはや優季が告白することしか考えてなかった。紅は何て返事するんだろう・・・疑問ばかりが浮かんで来る、紅は蒼志と優季が仲がいいことを知っている。けど蒼志が優季の事を好きなのは知らない。

そして学校につき紅とは別れ今度は優季と合った。今は喋る気にならなかった、優季とじゃなく誰とも喋る気にならなかった。一人になりたかった・・・けど優季は話しかけてきた。「メチャ緊張するー」
ドキドキするはー」正直イラツときた。けど怒ることなく「そっか頑張れよー」今出せる一番いい声をだした。けど不機嫌だと悟られた。「なんで怒ってんの？」蒼志は「別におこってねーよ」といいながらトイレへ行った。

今日は
優季とはほとんど喋らなかった。そして家に着いた・・・蒼志は死んだようにベットに
倒れこんだ・・・もう何もしたくなかった。寝ようと思ったすのとき、電話がなった。

どうせ優季だろう・・・「もしもし」「ウチだけど」やはり優季だった。「ウチ紅に告った。返事は
今週中には出るってー」

蒼志はそうですかと、言い電話を切った。そして桜の木を見に行っているいろと考えた。

次の日紅から相談を受けた。「優季に告られた。」「マジでか」「蒼志は知らない振りをした。

「どうしよう・・・」紅が悩んでいた。蒼志としては付き合ってほしくなかったけど反対も賛成もしなかった。

そしたら信じられない一言を紅が言った。

「オレ付き合おうかな・・・」

え・・・蒼志は嫌だったけど。否定したかったでもできなかった。

蒼志は精いっぱい声を出し「そっか」一言言った。

そして次の日優季からも紅からも付き合った事を聞いた。

苦痛の毎日だけど・・・(前書き)

蒼志は優季と紅が付き合ったことを知る。

優季は紅のばかし喋ってくる。

蒼志はとても苦しがる・・・

そして思わぬ光が差す・・・

苦痛の毎日だけど・・・

優季は紅と付き合ったというのにまだ蒼志と電話していた。そうしは紅と話さなくていいのか疑問に思っていた。そして聞いてみた。「紅と電話しなくていいの？」優季は「わかんない」笑いながら答えた。優季はいろんなところがきとうで世話が焼けるし、わがままだし、とても手がかった。けど蒼志はそんなところが好きだった、カワイイと思った。

次の日から優季からの電話がかかってこなかった。ちょっと心配になった。

学校へ行き優季に聞いてみた。「紅に電話するなって言われた？」
「うん・・・学校とかでもあんまり喋ってほしくないって言われた・・・」
「けど喋りたいから学校でこっそり喋る」その言葉にどきつとした。ヤベえ・・・カワイイ蒼志は思った。

蒼志は最近思う事があった。遠距離恋愛とかで直接ろくに喋れない人もいるんだから好きな人と楽しく喋れるだけで幸せなんじゃないかと思っていた。

そしてそんな日々が続いた。蒼志は優季とも紅とも今のままの関係を崩したくはなかった。

そりゃあ優季が蒼志と付き合うのが一番いいけど、そんなことは考える事ができなかった。

けど・・・蒼志には苦痛だった・・・優季と喋っても紅の話題しか出てこない毎日が・・・今までで一番苦しいと思った。

ある日蒼志は紅と紅の家で遊んでいた。ピンポン、インターホンがなった。紅は席を立ち玄関に行き、返ってきた優季と一緒に・・・蒼志は驚いた・・・まさか優季がくるとは思ってもなかった。帰るかな・・・そしてそれを実行に移した。用事があるから帰るね・・・紅に告げて。桜の木の下へ行った。そしてゆっくり涙を流した。流したというより勝手に流れてきた・・・静かに、静かに・・・

流し続けた。

そして次の日電話があった。「はいもしもい」「……………」
「……………」
返事がなくいたずら電話だと思った蒼志は電話を切ろうとした。その瞬間……………」

「う……………」
「ち……………」
「ただ……………」
「優季の泣いている声が受話器から聞こえた……………」

出合いがあれば別れも・・・(前書き)

蒼志は泣きながら電話してきた優季を励まし・・・
そして蒼志がとった行動は・・・

出合いがあれば別れも・・・

「・・・どしたの・・・？」心配する母のような声で聞いた「喧嘩して・・・」相当落ち込んでいた。

話を聞くと、優季は紅に「めんどくせえ女」って言われたらしい・・・「大丈夫か？」優しい声で聞いた。すると・・・驚きの返事が返ってきた。「もうダメかも・・・」蒼志は「でもまだ好きなんだろう？」ストレートに聞いた。「今は蒼志の方がいいかな・・・」「泣きながら答えた。ドキドキドキ・・・心臓の音が聞こえそうだ。そして勢い余って優季に・・・「オレと付き合ってよ・・・オレなら優季を泣かしたり、悲しませたりしないからさ・・・」優しく優季を励ますように言った。

優季は・・・「ありがと・・・蒼志・・・ウチこんなに優しくされたのはじめてかも・・・」蒼志はかなりの期待を膨らませた。「返事はもうちょっと待ってくれる？」考えるという事は付き合う可能性もあるということだった、うれしかった、心の底から・・・「うん待つよ・・・ずっと待ってる・・・」照れながらも自分が思ってる事をそのまま言葉として出した。そして「ありがと」とても優しく聞こえた。

そして次の日学校でよく喋った。でも紅の話題や恋愛の話になる事はなかった。

そして次の日・・・優季からの電話で「ウチ、別れた・・・」「そっか。」蒼志は優季に1つきいた。

「もう紅の事はいいの？」優季はもう吹っ切れてるかのよう元気よく「ウンー」

そして紅とも話した。蒼志がずっと優季の事を好きでいる事も・・・出会ってからの全てを紅に話した。紅は、「そっかこれからは相談乗るぜ」蒼志は・・・泣けてきた・・・が我慢した「ありがと」唇をかみしめて一言言い放った。

そしてそれから、優季には普通の日々が訪れた。が……蒼志は優季に告白して返事を待っている。毎日がドキドキハラハラだった。そしてそのまま3年生となる。始業式クラス分けの表をみると……違った……優季とクラスが別々になった。蒼志は3・2 優季は3・1、紅は3・3だった。そして優季と喋る事がだんだん少なくなっていくた。

新たな進展・・・（前書き）

蒼志は優季とクラスが別れ、喋る機会が少なくなっていく・・・

新たな進展・・・

蒼志と優季の間には少し隙間ができたようだった。

クラスが別れたばっかの時は電話も少々していたがだんだん少なくなっていた。

そして電話もなくなった。ある日優季に電話をした。優季が電話に出た。「もしもし」「オレやけど」

いつもどつりの声が聞こえてくる。「あんさー返事まだ？」あんまりあせらせるのはよくないと思いつつも待ちきれなくて聞いてしまった。優季は「今考え中なのーもうちょっと待って・・・」

「真剣に悩んでくれる？」蒼志は思い切って聞いてみた。「うん・・・もちろんー嫌いだったら即振ってるよ」蒼志はホッとした。よかつた真剣に考えてくれてる・・・「そっかーありがと」そして徐々にまた電話での世間話が続いた。やはり楽しい時間は風のように早く過ぎ去った・・・

次の日、朝礼があつた。座つた時に優季は近くにいた。そこでも楽しく喋っていた。

付き合つたらもっと楽しんだらうなーそんな事を思いながら喋っていた。

家に電話がかかつてきた。優季だろそう思いながら電話に出ると、違つた。優季ではなかつた。

クラスが一緒の花形柚弥はながたみゆだった。柚弥はカワイイ顔立ちをしており穏やかな性格で、

頭がよくとても優等生だった。そんな子がオレに何の用だろう・・・「どした？」蒼志は問いかける。

柚弥は「話があつて電話しました。」とても丁寧な口調だった、「なに？」蒼志は普段どつりの口調で対処した。「実は・・・蒼志君のことが好きになつて・・・」「蒼志は驚いたまだ出会つてまもなく話も少ししかしてないのに・・・」「そうなんだ・・・」「柚弥は「だ

から付き合ってくれませんか？」

蒼志は迷うことなんてなかった。「ゴメン・・・オレ好きな人居るから・・・ホントゴメンな・・・」柚弥は戸惑っていたが冷静さを保ち「そうですか・・・」言葉の口調は変わってなかったものの。柚弥の悲しんでる感じがすごく伝わってきた。

今日は優季に電話をした。「優季？今日さー柚弥に告白された」「エ・・・マジで？で・・・どうした？」蒼志は「マジでーどうしたって・・・断ったにきまつてんだろーオレには優季がいるだろー」優季はうれしそうに「ありがとう」優季は続けた「こんなに優しくしてくれたの蒼志だけだよ・・・」

蒼志は「あたり前だろ大好きだもん」自分の気持ちの大きさを優季に伝えた。優季は・・・「ふっふっ」笑った蒼志は「何で笑うだよ」優季はうれしそうに答えた。「最初さ蒼志好きって一言言うのにかなり苦労してたのに・・・今では余裕で言ってるじゃん」

「蒼志・・・」「何？」
・・・
・・・
「決めた・・・」優季の一言が心の中に響いた。

perfect LOVE (前書き)

優季は何かを決心した・・・
その決心とは・・・

「なにを……」蒼志はゆっくりきいた。優季は……「決めたんだ」「何を？」

「うち蒼志と付き合う。」……「信じられなかった。夢じゃないよな……何度もほっぺをつねった。夢じゃない。今まで片思いしてた相手がオレと付き合ってくれる……そうしは、涙が出た……その涙は今までのように悲しくじゃなくうれしすぎてだった。やっと気持ちがつたわった。そんな思いでいっぱいだった。優季は続けた。「まだ完璧に好きなわけじゃないけど……蒼志と付き合えば何かが変わる気がするし……蒼志とはなんか運命的なものを感じるっていうか……一緒に居ると気が落ち着くんだよね……なんか照れるな……」蒼志の涙わほっぺを渡り床にぽつぽつ

落ちていた、そして泣きながら「こっちのが照れるよ、ありがと優季……オレも完璧に好きになってもらえるように頑張る……」そして電話を切り蒼志は真っ先に向かった。桜の木の下へ……紅にも言った。紅もうれしそうに、おめでとと言ってくれた。

そして次の日、学校が終わり帰るとき、優季が待っていた。そして「一緒に帰る……」蒼志は迷わず返事した。「うん」そして帰り道優季に桜の木の下のお話をし、桜の木の下に2人で座っているなことを話、家へ帰った。

電話がかかってきた。「もしもし」蒼志が電話に出ると、「ウチだよ」優季の声が聞こえてきた。「どした？」「携帯買ってもらった」「うれしそうに、無邪気な子供のように喜んでいた。そしてメアドを教えてもらい、メールをした。これからはメールでやり取りをすることになった。

楽しい、先生の悪口をいったり、ドラマの話をしたりおもしろかった。

次の日、学校が終わり蒼志は5階に向かった優季との約束の場所へ行った。優季の家と蒼志の家は逆方向だから毎日一緒に帰るのはやっぱり蒼志でもきつい、蒼志は「おくつてくよ」といったのだが優季もさすがにえんりようしたらしい、だからこうして学校が終わったら5階で話すように約束した。

話が終わり2人はそれぞれの家に帰って行った。

蒼志は幸せに思っていた、こんな幸せがずっと続けばな・・・こんな事を思っていた。

「おやすみ」優季とのメールの最後の言葉を見たとき、蒼志はなんだか胸騒ぎがした。

大切なものはもろく壊れやすい。だからギュツと握ってはいけない。そっと優しく包んであげなければ・・・蒼志まだ気づいてなかった。なくしかけている光を・・・

perfect LOVE (後書き)

なかなか頑張つて作ってます>>
できれば感想お願いしますー><

s e p a r a t e d s c a t t e r e d (前書き)

蒼志は優季と付き合っことができて
充実にた毎日をおくれていたが・・・

「え……うそでしょ……戸惑っていた。「ホント……ゴメン……」何が何だかわからなかった。優季と付き合ってから1カ月たったころ優季から衝撃の言葉を聞かされる。

なんと優季は父の仕事の関係上東京に引っ越すというのだ……優季はもう蒼志の事が好きになっていた。そしてこれからだというのに……蒼志は力が入らなかった。卒業式もでられない……高校は東京の学校に行くようだ……でもやっぱり卒業式は一緒に迎えたかった……

次の日いつもの5階で話をした。そして今日は一緒に帰り桜の木のところに行った。

どうやら出発は1週間後らしい……「ホントごめんね……」「何度も謝る優季に蒼志は「うん悪いのは優季じゃないし……しかも……遠距離だからって……別れるわけじゃないじゃん？」優季はゆっくりうなずいた。……蒼志は優季に高校が決まったら合いに行くことを約束した。

そして別れの日……蒼志は優季を桜の木の下へ呼び出していた。蒼志は優季に袋を渡した。

中には蒼志と優季おそろいのハートのキーホルダーが入っていた。そして木の下に座り2人で今までの事、これからの事を話した。そしてついに時間がきた。優季は「そろそろ行かなきゃ……」「元気になる下に行った。蒼志はそんな優季を見て、「最後までい2人笑ってさよならしよ」蒼志は精いっぱい笑顔を作った。優季も作ったそして「じゃあね」優季はきりだした。蒼志は「うんじゃあね」笑って言った。が目からは2人とも涙が流れていた。そして優季は蒼志の胸の中に入り。そして唇を重ね合わせた。「じゃあね。絶対合いに来てよ……」「うん……じゃあね……合いに行くから……」

2人はそう言った優季は背を向け歩きだした。蒼志はそのまま後ろ姿を見つめていた。

蒼志はしばらく桜の木を眺めて立っていた。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。目覚ましが鳴っている。目覚ましを止め。顔を洗い学校へ登校した。

そして1組を見に行くそこにはやはり優季の姿はなかった。

出合いがあれば別れもあるこの言葉の意味のつらさがしみじみと心に伝わった。

家に帰りハートのキーホルダーは見つめている蒼志は「優季今なにやってるかな・・・」

さみしそくに優季の事を考えていた。

イラダチ(前書き)

蒼志は受験が近くなり・・・
焦りがでてくる。

イラダチ

蒼志と紅は同じ志望校だった。蒼志と紅は今日神社に行く予定だ。蒼志は紅の家に行き、そして神社に向かった。神社では合格祈願のお守りを買って、絵馬を書いて、おみくじを引きおさいせんをした。絵馬には「絶対志望校合格 by 蒼志 紅」と書いた。2人とも志望校に受かるか受からないかの瀬戸際で猛勉強をしていた。蒼志は勉強中優季とメールするのをやめていた。メールするのは、午後1時〜午前12くらいまでだった。優季も少しは勉強をしていた。ある日、勉強中優季からメールがきた。蒼志は「勉強中はだめだっ ていったのに・・・」ため息をつきながら携帯を開いてメールをみた。そこには「もつとメールしてよー」と書かれていた。蒼志はメールをしたと言われてうれしかったけど。今メールしたらやめられなくなると思い。「ゴメン・・・オレも優季とメールしたいけど・・・受験が終わるまで我慢してくれない？オレも勉強頑張るからさー」

送信ボタンを押した。2・3分後携帯がなった。「蒼志ってウチと勉強どっちが大事なの？」と書かれていた。「そりゃあ・・・優季だけど」送信した。そのあと着信音がなった。そこには「じゃあメールしてよ」と書いてあった。そりゃあ蒼志だってメールがしたかった。でも優季と結婚することを考えたら、今頑張って勉強して、いい大学に入りいい就職先に就職し、優季に楽をさせるのが1番いいとおもったからこうして、蒼志はがんばっているのに優季はどうしてわかってくれないんだろう・・・そんな事を思いながら「受験が終わるまで我慢しろってー優季のためだから」送信した。優季から「今メールしたいの」カチンときた。蒼志は冷静さをなくし「だから我慢しろって」つい怒ってしまった。そのあとメールは返ってこなかった。蒼志は少し自分を責めたが・・・あれは優季が悪いんだと自分に言い聞かせた。そして11時になったら優季からメール

が届いた。「ゴメン……」一言書かれていた。蒼志は「オレの方こそゴメン……焦りすぎてたかも……」優季からすぐに返信がきた、「いいよんー許してあげるーでもそのかわりー志望校合格しなかつたら許さんぞー（笑）」と書かれてあって……蒼志は今までの焦りが吹っ飛んだ気がした。

そして試験当日……蒼志は今まで勉強した全てをぶつけた。試験が終わり真つ先に優季にメールした。「手ごたえバツチシ」紅もできたと言っていた。あとは合格通知を待つだけだった。

イラダチ（後書き）

見てくれた人ありがとうございます>><<
できれば感想をお願いしますー

恋人と親友（前書き）

蒼志は高校が決まり卒業式を迎える。
そして、とんでもないサプライズが・・・

恋人と親友

蒼志と紅は同時に封筒を開けた。そこには……2人とも……
「合格」の文字が刻まれていた。

「やったーーーーー」喜んだこの3ヶ月間必死で勉強してきた甲斐があった。

そう、蒼志と紅2人とも志望校に合格したのだ。蒼志は優季に真っ先にメールで合格を知らせた。

「マジで！よかったじゃんーうちも合格だったよー」優季も同じ日に合格発表だった。

家では蒼志と紅で大はしゃぎだった。そして学校の先生に伝え塾の先生にも伝え友達にも伝えた。

そして2人は打ち上げということで友達を集めカラオケに行った。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまった。

そして中学校最後の日……そう卒業式だ……この卒業式出来れば優季と一緒に帰れたかった。蒼志はそんな思いでいっぱいだった。優季がいてくれれば……歩きながら優季の事ばかり考えてた。蒼志はいつもどおり紅と登校していた。そして学校に着いた。そして校門でみんなが溜まっている。

「どうしただろ？」「しらねー」そして蒼志と紅は溜まっている中に入って行った。そしてとんでもない光景を目の当たりにした。その群集の真ん中には……「優季……」

真ん中には優季が立っていた。転校したはずの優季が……「優季ーーーーー」叫んだ……

うれしくて、うれしくて優季をギュッと抱きしめた……優季のおいがした……温かい優しい感じがした。紅は外からそっと見守っていた……

優季も「蒼志……逢いたかった……」「オレもだよ……」蒼志と優季には最高の卒業式になった。卒業式が終わり蒼志、優季、

紅の3人で帰って行った。そして紅とは桜の木で別れて、蒼志と優季は

桜の木の下で喋ることにした、そしてまたうれしい真実を聞く。蒼志は前から優季の父に電話をして卒業式に出席できるようにお願いしていたでも優季の父はそれを認めてくれなかった。その事について紅に何度か相談していた。優季がこれたのは、紅のおかげだったのだ・・・紅も電話して必死に頼んでくれた事を聞いた。そして優季は今日、蒼志の家に泊まる事になっていた。紅には「ありがとう」と送った。

「全然！オレができる事はあれくらいだったからさ。」と返ってきた。泣けた・・・やっぱり紅は大親友だと改めて思った。そして蒼志と優季は朝を迎えた・・・

刻々と迫る別れの時（前書き）

優季と再会した蒼志でも
別れの時が刻々とせまる・・・

刻々と迫る別れの時

優季は今日もう1日泊まり明日の昼出発する予定だった。「おはよう」「おはようー」2人が目覚め、顔を洗い、朝ごはんを食べて支度をし終えたら丁度、ピーンポーン、インターホンがなった。「オレオレー」紅だった。「早く行こうぜー結構込むぜー」紅が喋っている。

今日は蒼志優季紅で遊園地に行く予定だ。家を出て、電車に乗り遊園地に向かった。

そして遊園地に着き、「まずジェットコースター乗ろー」無邪気な子供のように優季ははしゃいでいた。蒼志も「わかったからー服の袖引つ張るなよー」まるで親子のようだった。

ジェットコースターに乗った後、お化け屋敷に行こうと言い出した。

蒼志は「オレはいいよ・・・腹痛くなってきたし・・・嘘をついたそう、蒼志はお化けが大の苦手だった。優季は「もしかして・・・怖いの？」蒼志はみえを張った「別に・・・怖くないけどー」

優季はここぞとばかり「じゃあ行こうよー怖くないなら行けるでしょー」蒼志はしょうがないと思い「おお・・・いいよ・・・行つてやるよ」本心は本気で行きたくなかった、が仕方がなかった。

そしていよいよお化け屋敷がスタートした。優季の手をしっかりと握り、歩き始めた。「手震えてるよー怖いでしょ？」優季は茶化してきた。「全然・・・怖くないし・・・」まだみえを張った。

ギューイーン ゴーゴー シューー 不気味な音が聞こえてきた。蒼志はきずかないうちに早足になっていたそして、なんなくお化け屋敷を出た。でた蒼志はホツとしていた。そのあとゴアアトに乗ったり、バイキングに乗ったり。そして夜になり最後と言えばやっぱり観覧車でしょと言うて乗ろうとしたけど紅が「オレは下で待つてるよ2人で行つてこうよ」蒼志は「ありがと」と言い2人で乗り込んだ。2人で寄り添い手をギュツとにぎっていた。そしてお土

産を買い蒼志と優季と紅は楽しい1日を過ごした。

そしてまた朝を迎えた。

今日は10時に起きた。そして朝支度をして、蒼志は「今日はどこ行きたい？」優季に問いかけた。

「今日は昼でまた帰らないといけないから・・・桜の木の下でおしやべりしよー」「おk」

そして桜の木の下でいろいろと喋った。楽しかったすごく・・・でも・・・別れの時は刻々と迫ってきていた。

タイムリミット(前書き)

ついに優季と蒼志はまた離れ離れになってしまっ……

タイムリミット

優季は今日の1時に帰る予定だった。現在12時あと1時間・・・蒼志と優季は桜の木の下で喋っている。これからの事・・・「夏休みとかになったらそっち行くからねー」「うん・・・絶対だよー」平凡な会話が続いた・・・現在12時半あと30分・・・蒼志は「そろそろ行く時間だね・・・」優季は悲しそうにうなずいた。「そうだ」優季が何かを思い出したかのように言った。「これおそろいのキーホルダー」掌の中にはキティーちゃんのカワイイキーホルダーが2つ乗っていた。蒼志はそれを受け取り「ありがとー」すぐさまケータイに付けた・・・そして現在1時・・・ついにきた・・・別れの時が・・・また離れ離れ・・・蒼志と優季は約束をした。

「オレさ・・・東京の大学受けて東京に行つて・・・優季に会いに行くねそれからは一緒にくらそ」

蒼志は思い切つて言った。「うちもそうしたいけど・・・父さんがいいて言うかな？」蒼志は「まあまだ先の話だし・・・今度はなそー」笑い話でごまかした・・・「おっけー」優季は明るく答えた。

そして優季が口を開く・・・「そろそろ行くね・・・じゃね・・・」「おう・・・じゃあな・・・」

ひきつりながらも答えた。蒼志の心の中は離れたくないその一心だった。優季は蒼志に背を向け歩き始めた。蒼志は我慢できなかった・・・涙が出たその瞬間優季の横顔にも涙が見えたそして蒼志は地面を全力で蹴つて前へ進んで優季を後ろからギュツと抱きしめた。2人で泣きながら・・・桜の木の下で・・・しばらくそんな状態が続いた・・・優季は何も言わずにまた歩き始めた。そしてケータイを触つて行つた。次の瞬間ピピピピッピピ蒼志のケータイが鳴つた。メールだ。優季からだ・・・素早くメー

ル内容を見たそこには……………

「大好き」

一言だけ書かれていた。そして蒼志も「大好き」一言だけ書いて送った。

そして優季の姿はもうみえなくなっていた。

その日夢をみた蒼志と優季が草原で寝ながら楽しそうに喋っている。そんな夢だった。

蒼志にはその夢が自分たちの未来を表してるかのように見えた。

遠距離の終焉（前書き）

蒼志は高校に入学する・・・
そしてとんでもないトラブルが・・・

遠距離の終焉

蒼志と紅は桜が散る中歩いていった。そして校門の前に立った、校門と言ってもいつもとは違う……

高校の校門だ……。今から新たな高校生活の始まりだった。

帰ってから優季とメールをした。「今日入学式だったの?」「うんー校舎がメチャきれいだっただー優季は入学式じゃなかったの?」「優季は「うんーそうだよーカッコいい子見つけたんだー」蒼志はイラストときた。普通彼氏とのメールでカッコいい子みつけたーとかいうか?蒼志は思った。優季はそうゆう事を軽々と言ったりするところがたまに傷になる。蒼志はイラストときたので「オレもーかわいい子見つけちゃったー」蒼志はやり過ぎたかな……。と思いつながらも怒っていた。紅に愚痴っていた。そして蒼志と紅は気分転換にカラオケに行った。優季からは「3・4人見つけたもーん」蒼志はもう無視をした。

そして紅と2人ではしゃいだ。そしてカラオケが終わり携帯を開くと、メールが3件送られていた。全て優季からだった。メールを見ると1通目「無視しんでー」2通目「なんで無視すんのマジむかつく……」

そして3通目……「蒼志にとってうちはそんなもんだっただ」蒼志はかなり怒れて「無視してほしくなかったら彼氏目の前にカッコいい子見つけたとか言うなよ……」蒼志はちよつと怒り口調だった。

「もう別れよ……」蒼志は……。文字を見間違えたのじゃないかと何度も確認した……。だがそこにはやはり……「もう別れよ」その文字が刻まれていた。蒼志は何て返事すればいいか全然わからなかった。頭には嫌だ……。そんな言葉しか思いつかない。そして蒼志は「嫌だ……」一言だけ返事した。そして……「ゴメンね……」そしてそれから優季とのメールはなくなった。

そして蒼志は桜の木の下へ行き静かに泣いた。・・・
どうしてどうして・・・どうしてだよ・・・そんな事しか考え
れなかった。

それから2カ月なにもメールはなしで時が流れた。

蒼志は優季のことを忘れる事がだいぶできた。最初は大好きで忘れ
なかつたけど・・・もう人を好きにならない。そんなことを思っ
ていた。

そして蒼志と優季の恋が終わった・・・?・・・

恋から愛へ（前書き）

蒼志と優季は別れてしまっ……が……

恋から愛へ

蒼志の心の奥底にはやはり優季がいた。やはり忘れる事が出来ない。蒼志は桜の木の下へ行こうと歩いていた。桜の木の近くに来たところで蒼志の足が止まった。

なんと目の前に優季がいた。状況がつかめない。優季も何が何だかわからない感じだった。

蒼志はぎこちなくあいさつを交わす「よ・・う」「つよ・・」そして「どこ行くの？」蒼志は問いかけた。優季は「・・桜の木見に来た。蒼志は？」「オレも・・」そっかと言った優季はニコツと笑い「一緒に見よー」やっぱり諦められるわけない・・蒼志は思い優季と並んで木の下に座った。

優季が口を開いた。「やっぱり忘れられんわ・・」「・・蒼志は何も言う事が出来なかった。

「でもびっくりした優季こっち来てたの？」優季は「うん今日着いた。」

蒼志は落ち着いたから聞いてみた「誰が忘れられないの？」優季は照れたしぐさを見せながら「蒼志・・」ポツリと言った。蒼志の頭には疑問があった「優季が別れよって言ったんじゃん」

それからなぜ別れよって言ったのかいろいろと聞いた。聞いた話によると優季は蒼志との遠距離恋愛に限界を感じたらしい、だからわざと蒼志を怒らせ別れのきっかけを作ったと言っていた。蒼志はうれしさでいっぱいだった。優季は「ゴメンね・・」といって蒼志の唇にキスをした。そして蒼志の腕の中に入って「大好きだよ・・今でも・・ずっと」蒼志も「オレも大好きだよ」といってそっと腕を優季の背中にまわした。

次の日から蒼志は桜の木の下にはほぼ毎日と言ってもいいほど行っている。蒼志は蒼志と優季を引き合わせた桜の木の下がよりいっそう好きになった。

学校で紅に桜の木の下で優季と会った事全てを話した。

それから蒼志と優季の間にはより一層強まった愛が生まれた。もう絶対離さない。ずっともう好きじゃない・・・愛してる。そんなレベルにまで達している。

そして蒼志は高校3年になりまた大学受験の時期がやってきた。蒼志は優希の近くに行くため、東京の大学に行くことになっている。

勉強はやっぱりしなきゃいけない。優季のために。

全ては優季のために・・・

高校生活（前書き）

蒼志と紅は普通で平凡の日々を送る。

高校生活

「今日どこ行く?」「適当にマックでも行こー」蒼志と紅は学校が終わってからの話をしていた。

蒼志と優季はあれからまた平凡の日々を送っている。マックでは男子2人で恋の話をしていた。

最近の紅の口癖は「彼女ほしー」だった。蒼志と紅は高校でも違うクラスだった。だから蒼志は「オレのクラスの彼氏いなさそうで紅によさそうな子紹介しようか?」紅は満面の笑みを浮かべ「さすが親友ー」そして蒼志はその女の子にメールをした。その女の子の名前は神崎三奈美かんさきみなみ三奈美からすぐにメールの返信があつた「今ウチの親友と遊んでんだけど・・・2人でもいい?」

蒼志は紅にきて「いいよー」とメールを返した。

そして待つ事15分「いらっしやいませ」店員の声がして「蒼志ー」元気な三奈美がきた。その横に・・・大人しそうで、優等生っぽい子がいた。あれが三奈美の親友だろう・・・そして2人は席について。自己紹介をしていった。三奈美の親友は渡辺愛海わたなへあみ。蒼志はふと横を見ると紅が。

ちらちら愛海のことを見ている。蒼志は心の中で「紅惚れたな・・・」
・「確信していた。三奈美もちらつと愛海をみたら愛海も紅を見ていた事に気づき蒼志と三奈美は2人が両想いなことが簡単にわかった。

それから4人で遊ぶことが多くなり。

ある日朝紅と登校していると紅は「オレ愛海の事好きなんだ・・・」蒼志は「ぶつぶつぶぶ」笑った。紅は「何笑ってんの・・・」不思議な顔でこつちをみてる。蒼志は「そんなん知ってたよー初めて会ったときから好きだったでしょー」蒼志は茶化した。紅は「知ってたのかよ・・・」そして蒼志は紅に告白することを勧めた。そして次の日紅は愛海に告白した。

さらに次の日愛海からOKの返事をもらったと言ってきた。そしてその事を優季に話した。

優季は「じゃあその3人で東京の大学来てーダブルデートできるやん」などメールしていた。

優季から愛海のメアドを教えると言われたので優季に教えた。それから優季と愛海は長い時間メールをしていたようだ。

次の日3人で東京の大学に行く事を目標に勉強を始めた。

そして・・・高校3年・・・また受験の時期が・・・

新たな仲間（前書き）

蒼志と紅と愛海は東京の大学えお目指す。そして新しい仲間が・・・

新たな仲間

蒼志は最近林城碧兔りんじょうへきていに勉強を教えてもらっていた。碧兔は成績優秀、人気者でクールだった。また碧兔の彼女がなんと愛海の幼馴染で三奈美とは違う親友飛綺凜稼ひしまりんかだった。そしてその2人も東京の大学を受けるといふのだ。そして成績トップクラスの碧兔を中心に勉強が続いた。成績がいい順番としては、碧兔、愛海、蒼志、紅、凜稼だった。でも紅と凜稼は似たり寄りだつた。志望校はみな同じにした。碧兔は評価A愛海もA蒼志はB紅はDもちろん凜稼もD紅、凜稼はやばかつたが志望校を変えることなく必死で勉強して受験ちよつと前までには評価Bまでになった。蒼志はAになった。そしてセンター試験の日がやってきた。蒼志はAになった。そしてカンカンテストに文字を書く音が室内に響く。「そこまで」センター試験が終わつた。

次の日答え合わせを学校でやった。碧兔と愛海はほぼ合格間違いない。蒼志もほぼいい。問題の紅と凜稼もセンターがからなり出来ていた。そして5人は打ち上げと言う事でカラオケではしゃいだ。もちろん優季にも碧兔たちの事も言つてある。

そしていよいよ・・・志望校の受験日。
ドクドク心臓の音が鳴っている。最後に優季にもらつたキーホルダーをギュッと握りしめて。

テストに取りかかった。碧兔も愛海も蒼志も紅も凜稼もみな真剣に取り組んでいる。

目を閉じゆっくり深呼吸をしテストを開いた。「止め」試験管の音が響いた。終わってから5人はマックへ行き「疲れたー」などと言いながら喋っていた。みんなテストはできたようだ。

あとは合格発表を待つだけ・・・テストが終わり優季とのメールがいつもより3倍くらいに増えた。

そして・・・合格発表の日・・・

旅立ち（前書き）

蒼志、紅、碧鬼、愛海、凜稼、の5人で東京に行く。

旅立ち

ピピピピピピピ目覚ましが鳴る。時計は8：40分を示している。「ヤベエ」蒼志はベットから飛び起きて洗面所に向かって外出の準備をした。蒼志は今日蒼志を合わせて5人で旅立つ前に町のいるなどところを回るといふ計画を立てていてそれが今日だった。9時に紅の家集合だった。蒼志は自転車を全力でこぎ紅の家へ向かった。9：5分蒼志はチョット遅刻をした。「よしそろったな」碧兔が切り出す。

この日は5人の思い出の場所を回るんだった。最初は愛海のリクエストで草原だった。そこは緑があたり一面に広がっていてとても心が落ち着く場所だった。愛海は「ここ悩んだときとかいっつも来た。」「

次は凜稼のリクエストでカラオケだった。「ウチさー悩んだりしてもカラオケで忘れたりしてたからさー」昔を思い出しながら喋る。次は碧兔のリクエストで図書館だった。碧兔は中学1年のこと頭がすぐく悪かったらしい・・・2年から休みの日以外図書館に通って勉強していたらしい。次は紅のリクエストで自分の家の部屋だった。紅は「何が何でもやっぱここが一番落ち着くじゃん」紅はそう言いながらベットに飛び込んだ。最後は蒼志のリクエストだった。もちろん桜の木の下だった。ここにはホントにいるんな思い出が詰まっている。悲しい思い出もうれしかった思い出も・・・東京にもこんな木があるだろうか・・・蒼志は心の中で問いかけていた。

次はみんなの小・中学校を回った。校舎の中に入り席に着いたり体育館でバスケットをしたりおもしろかった。久しぶりだった。

5人は明日の朝東京に行く予定だった。そしてその朝を迎える。

蒼志は全力で家を出ていく。そして駅に5人がそろった。そして故郷とのお別れの時が来た。蒼志は「また・・・桜の木見に行くね・・・」そんな事を思いながら新幹線からの景色を眺めていた。

新幹線に乗ってる間みんな爆睡していた。そして東京に着いた。
蒼志はあたりをキョロキョロしている。碧兎は「どしたの？」蒼志
に問いかける。蒼志は「優季が東京駅で待ってるって言ったから・
・探してる。」そう答えてまた周りを見渡す。
そしてふと目に入った。優季の姿が・・・・

旅立ち（後書き）

更新遅くなってすみません>><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8604p/>

恋桜

2011年10月8日14時00分発行